

高齢者の療養生活に関する意向

Intention concerning recuperation life of senior citizen

水野敏子 守屋治代 浅川典子

要旨

高齢者が病気になった時にどのような治療や療養生活を送りたいと考えているのかを把握する目的で、老人クラブの会員 3845 人に対して調査を行った。その結果、高齢者は、治らない病気であっても説明を受けたいが半数以上あり、最後は自宅で療養したいと望んでいる人が 8 割を越えており、延命よりも安らかな苦痛のない日々を送ることを望んでいた。しかし、実際には自宅以外で最後を迎える高齢者が多いことから、安心して在宅療養を継続できる体制を整備する必要があることが示唆された。

Ⅰ. はじめに

介護保険が導入され、介護の必要な高齢者に対して安心して介護が受けられる制度が整備されてきている。大東町は平成 14 年、65 歳以上の高齢者が 20.4%であり全国に比べて高率である。しかし大東町の高齢者が病気になったとき、どのような治療や療養生活を送りたいのかについては明らかにされていない。

本調査は大東町の現在比較的健康な高齢者が病気になった時にどのような医療や介護を受けて生活したいと考えているのかを明らかにし、その結果により、どのような支援が必要であるのかを検討するための資料を得ることを目的とした。

Ⅱ. 方法

1. 対象

対象は大東町老人クラブ全会員 3845 人のう

ち回答を得られた 3173 人である。回収率は 82.5%であった。

2. 方法

大東町の老人クラブの会員に対して、各地区の会長より各会員へ調査票を配布、回収を行った。回答は、各会員が調査票に同封された封筒で封書し会長に渡すようにした。実施時期は 10 月である。

3. 内容

調査内容は、健康状態と療養状況、療養希望場所とその理由、延命治療への希望、在宅サービスの利用希望等について調査した。

Ⅲ. 結果

1. 高齢者の基本的属性

性別は男性 1335 人の 42.1%、女性が 1759 人の 55.4%であった。

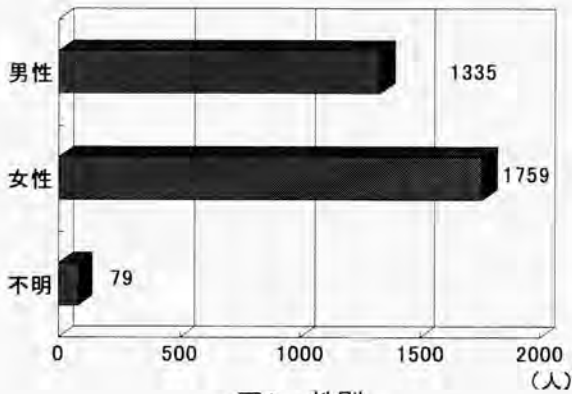


図1 性別

年齢は64歳以下が340人の10.7%、65歳～69歳が612人の19.3%、70歳～74歳が797人の25.1%、75歳～79歳が659人の20.8%、80歳～84歳が388人の12.2%、85歳～89歳188の5.8%、最高年齢が101歳であった。以上の結果、70歳代45.9%と約半数を占めており、その中でも70歳～74歳が最も多い年代であった。次いで60歳代の約30%であり、80歳代が18%、90歳以上が3.1%であった。

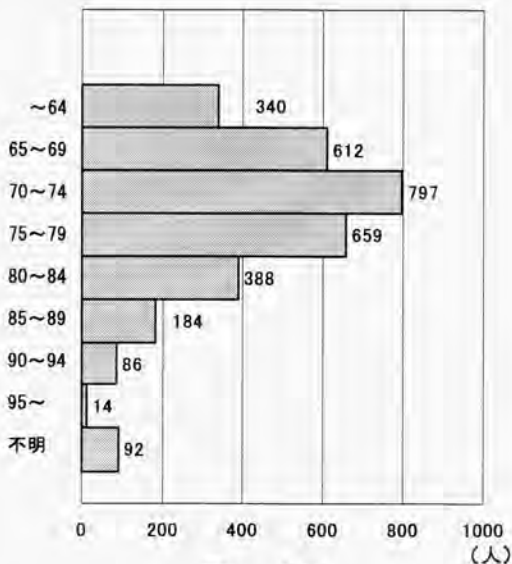


図2 年齢

家族構成は子ども家族と同居が最も多く、1987人の62.6%、次いで夫婦二人暮らしの408

人の12.9%、独身の子もとの同居が369人の11.6%であった。一人暮らしは94人で3.0%であった。

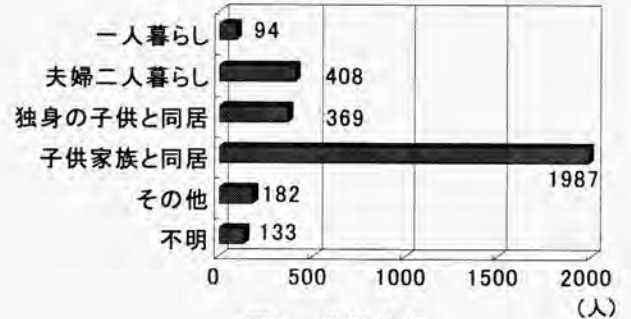


図3 家族構成

2. 治療状況

治療中の病気の有無を見てみると、現在治療中の病気がある人は2121人の66.8%、ない人が929人29.3%であった。



図4 治療中の病気

病気のある人のうち974人の47.1%が開業医を受診し、959人の46.3%の人が病院受診しており、開業医と病院とが同じ割合であった。

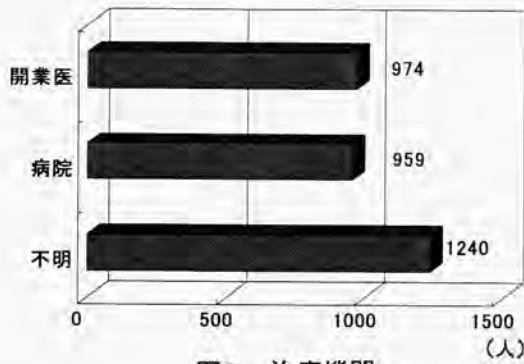


図5 治療機関

現在サービスを利用している人は、デイサービスが最も多く134人の4.2%、次いで在宅訪問サービス64人の2.0%、給食サービス29人の0.9%であった。

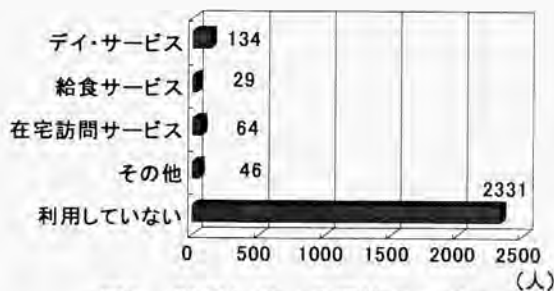


図6 利用している福祉サービス

3. 療養に関する意向

1) 病名や病気に対する説明

「病名や病気に対してありのままの説明をしてもらいたいですか」という質問に対して、「どのような病気でも説明してもらいたい」が1691人53.3%と半数以上を占めていた。次いで

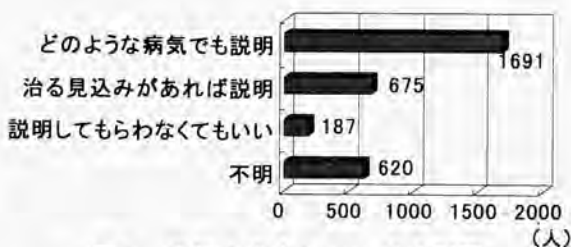


図7 病気や病名についての説明

「治る見込みがあるならば説明してもらいたい」675人の21.3%であり、「説明をしてもらわなくてもいい」は187人の5.9%であった。なお未記入が19.5%と多かった。

2) 療養場所の希望

「もし病弱になられた場合、どこで療養されることを希望されますか」との問いに、最も多かった回答は「苦痛であれば一時入院するのはやむをえないが、人生の最後は自宅で過ごしたい」であり、2397人の75.5%であり、次いで「どのような状態であっても、最初から最後まで自宅で過ごしたい」が287人の9.0%であり、ほとんどの人が自宅で最後を迎えたいと考えていた。「最初から最後まで病院で過ごしたい」は248人の7.8%であった。「その他」は60人の5.7%見られたが、この中には「在宅で療養して最後は病院に入院したい」という回答も多く見られた。

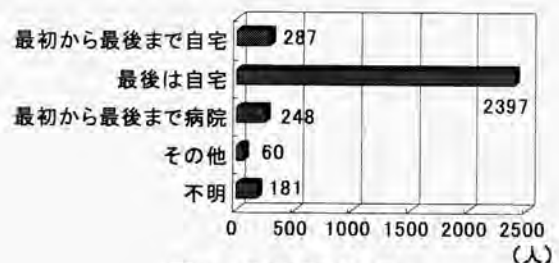


図8 療養希望場所

3) 病院での療養を希望する理由

上記の療養場所の希望の中で、「最初から最後まで病院で過ごしたい」を選択した248人について理由を複数回答で求めた結果、最も多かった理由は「家族が大変だと思うから」であり185人の74.6%、次いで「24時間体制で看護してもらえと思うから」が101人の40.7%、「出来る限り十分な治療を受けたいから」が87人35.1%、「入院した方が長生きできると思うから」が21人の8.5%の順であった。

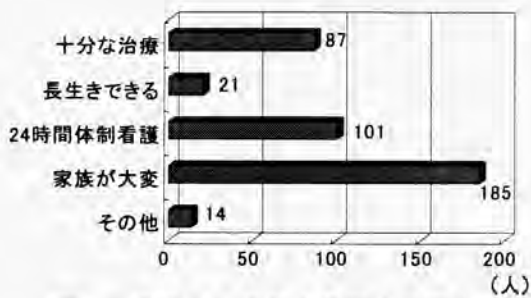


図9 病院での療養を希望する理由

4) 自宅療養を希望する理由

3) 療養場所の希望のところ、**「どのような状態であっても最初から最後まで自宅で過ごしたい」「苦痛であれば一時入院するのはやむをえないが、人生の最後は自宅で過ごしたい」**を選択した 2684 人に該当するものすべてに回答を求めた結果、「**住み慣れた家がいいから**」が 1666 人の 62.1%、「**家族がいてくれると安心するから**」1634 人の 60.9%と上記二つの理由が多くを占めた。ついで「**入院して命をひきのばすだけが良いとは思わないから**」983 人の 36.6%、「**往診や在宅サービスを受ければよいと思うから**」が 829 人の 30.9%、「**近所に友人がいるから**」765 人の 28.5%であり、「**入院して、点滴や鼻から管で栄養を入れるなどの処置を受けるのがいやだから**」は 462 人の 17.2%と多かった。また「**入院するとお金がかかるから**」と金銭的な理由を挙げたのは 388 人の 14.5%であった。

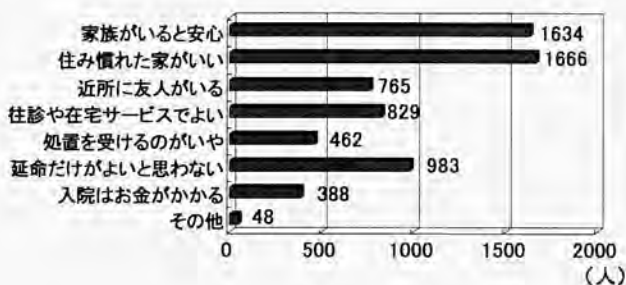


図10 在宅での療養を希望する理由

5) サービスの利用希望

「もし病弱になられても病院での治療が必要ない場合、だれにお世話を希望されますか」の質問に対しては「**家族と在宅サービスの両方を頼みたい**」が最も多く、1736 人の 54.7%であり、半数以上の人**が在宅サービスを利用しながら家族に世話を受けたいと回答していた**。次いで多かった回答は「**家族にたのみ、在宅サービスは利用したくない**」の 493 人の 15.5%であり、「**家族にはたのみまず在宅サービスを利用したい**」は 140 人の 4.4%であった。「**特別養護老人ホームなどの施設へ入りたい**」が 233 人の 7.3%、「**病院へ入院したい**」224 人の 7.1%であり、自宅以外のサービスを希望する人は 14.4%みられた。そして、「**無記入**」が 347 人の 10.9%と多かった。

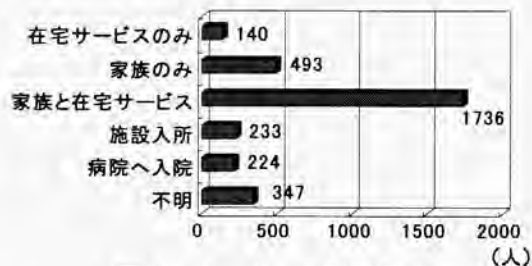


図11 サービスの利用希望

6) 病気治癒困難時の選択

「**病気が治らないとわかったとき、どのような選択をしますか**」の質問に対して、「**たとえ命が短くなっても、安らかな、苦痛のない日々を送りたい**」と希望する高齢者が 2614 人の 82.4%であり、ほとんどの人が安らかに過ごすことを望んでいた。「**あらゆる手段を用いて一日でも命を延ばすために努力する**」は 213 人、6.7%にすぎなかった。「**無回答**」は 346 人、10.9%であった。

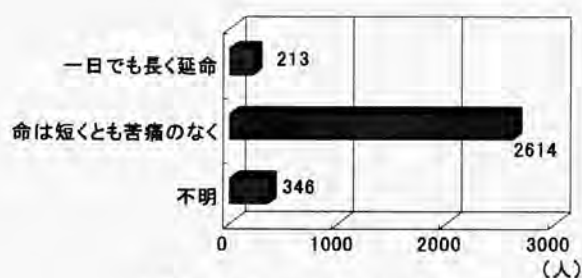


図12 治療困難時の選択

7) 病弱になった時の不安

「病弱になったときのことに不安や心配がおりますか」の質問に対して、「少しある」が最も多く1575人、49.6%と約半数であり、「とてもある」が806人の25.4%、「何もない」が516人の16.3%であった。

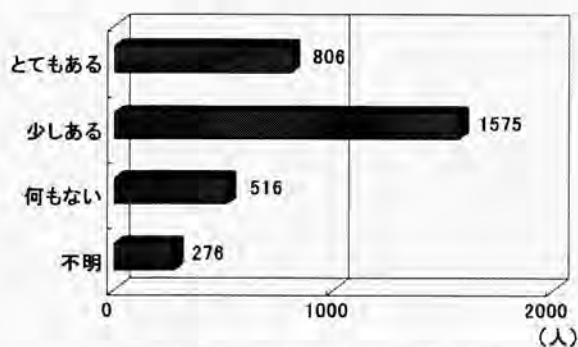


図13 病弱になったときの不安

IV. 考察

本調査の結果から、高齢者はどのような病気でも説明を受けたいとするものが多く、主体的に療養生活することを考えていた。また最後は自宅で療養したいと望んでいる高齢者が8割を越えており、その理由の多くは家族といると安心、住み慣れた場所で療養したいというものであった。一方病院で療養したいとするものの最大の理由は、家族が大変だからというものであった。そのほかの理由としては24時間体制で看護してもらえらるからであった。これらの理由から、在宅療養を行う際に、家族に負

担をあまりかけずに、24時間対応のサービスを提供できる体制づくりが求められていることが理解できる。平成12年に出された大東町介護保険事業計画によると、70歳以上の介護者が37.6%、60歳代が27.3%であり、介護者が高齢化していることが指摘されていた。本調査結果では、家族の介護だけを望む高齢者もみられたが、家族の介護と在宅サービスの利用によって在宅で療養することを望んでいた高齢者が多かった。これらの結果はサービス利用に関して理解が浸透してきたことや、介護者の高齢化、夫婦二人暮らしなどのために介護サービスの必要度が高くなってきたことが考えられる。今後は在宅サービスの利用者が増加していくと考えられるのでより一層の体制整備が重要となってくる。

多くの高齢者は病院よりも在宅で最後を迎えたいと望んでいた。しかし平成8年の大東町保健計画によると在宅死は平成11年には27.6%にすぎず、この数年大きな変化はみられない。介護保険が充実していくことにより、在宅で最後を迎える高齢者が増加していくのか、その推移を今後も見守る必要がある。

多くの高齢者は積極的な延命治療よりも、苦痛のない穏やかな日々を送ることを望んでいた。しかし実際にはどのような最後であったのかは明らかにされていない。また病院や自宅ではどのように苦痛が緩和されているのか等についても明らかにされていない。今後どのような療養環境で苦痛のない、穏やかな日々を過ごすことが可能であるのかを明らかにし、支援体制を整備することは高齢者の多い地域にとっては重要な課題である。病弱になったときの不安が強い人は多くはなかったが、少しあると回答している高齢者が多かった。今後年齢区分別や家族構成別に比較し、どの対象者がより不安が強いのか、また年代によって療養生活等に相違が認められるか否かについても今後検討する予定である。

まとめ

今回の調査結果は全国の調査結果と類似して

いた。多くの高齢者が在宅で療養したいと望んでいるが現実には難しい状況が見られる。今後は各地域で高齢者自身が主体的に参加し、現実的な支援のありかたを共に考える体制づくりが必要と考える。そのための検討資料として実際にどのような療養生活を送ることが出来ているのかについて、現状を明確にし、支援のあり方を探求することが必要である。

最後に、調査にご協力いただきました老人クラブの皆様に、感謝申し上げます。